
大好きな彼、大嫌いな彼女

春海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大好きな彼、大嫌いな彼女

【ISBNコード】

N8789F

【作者名】

春海

【あらすじ】

ずっとと思い続けていた彼が、大嫌いな女と付き合っていたと知つたら…。女がズルいのか、男がバカなのか。

タバコを吸う人は絶対に嫌だと言っていたのに。

時間にルーズな人は信用できないと言っていたのに。

顔はかつこいいけど中身は最低だねと言っていたのに。

なんであんたとタケシが付き合つてんの。あたしが知らない間に。
あたしの大好きなタケシとあんたが。

男に媚びを売るマ//。

男と女の前では態度の違つマ//。

自分の話しかしないマ//。

みんなの前でだけ良い子ぶるマ//。

嫌いな友達には挨拶もしないマ//。実は厚化粧のマ//。

男を口説くのが得意なマ//。

なんであんたはマ//なんかに惚れたの。あたしがいるのに。こんな
にあんたのこと大好きなのに。

「聞いたよ。マ//と付き合つてるって」

紙パックのピー・チティーにむせながら彼は答えた。

「は? 誰から聞いた」

「それは教えない。何で半年も隠してたの」

「別に隠してたわけじゃ…」

「まあいーけど。ねえ、一個聞いていい? ビ」を好きになつたの

真つ黒い前髪をいじりながら彼は

「わからない」と答えた。

外は寒くなっていた。

こうして2人で歩いていても楽しいのはあたしだけなのかな。あたしと歩いている今も、タケシはマリと一緒にいたいと思っているのだろうか。

大学に入学して成り行きで入ったサークルでタケシに出会った。マミも同じサークルに入った。

1年の頃あたしとタケシは仲が良くて、いつも一緒にいたり、夜に長電話をしたりしていたのに。2年になつてあたしはバイトが忙しくなり、あまりサークルに顔を出さなくなつていた。タケシのことは1年の頃から好きだったけど、ずっと気持ちを伝えられないままだつた。そして気づけば…

考えれば考えるほど、わからなくなることがある。

なんでタケシはマリを選んだの。

あたしはここで間違えたの。

「あたしたちのこと知ってるんでしょ」

ちつとも優しくない目をして彼女はあたしにこうつ聞いた。
昼休みの食堂はガヤガヤしていて落ち着かない。

「うん。聞いたよ」

「あーもづ。あんただけは知られたくないのに」

「何で? 何であたしに知られたくないの」

あたしは精一杯、これっぽっちもマリのことを悪く思っていない女を演じていた。

「だってあんた、タケシのこと大好きじやん」

「はあ? 全然そんなことないけど」

うれ。でもここで素直に言つたら負けだ。

「ほんとに? ならいいけど」

3限の授業が始まる頃、あたしたちは分かり合つた。フリをしていた。お互いに。

あたしが半年間も彼らが付き合つてることを知らなかつたのは、2人がそれを避けていたからなんだ。あたしがタケシのことを振り向かせたいと思つて取る行動全てが、彼らにとつては2人の間を邪魔するものでしかなかつたんだ。

広い廊下の真ん中で、この半年間の記憶がフラッシュバックする。タケシを好きになつてからタケシを想わない日はなかつた。タケシを好きになつてからのあたしの記憶は、タケシを想う感情でしか表せない。

今まで鮮やかな色をしていたあたしの片思い日記は、ちょうど半年前から灰色に染まつていった。

大好きな人を想うことで、大好きな人の幸せを邪魔していたなんて。

授業が始まり、教授がつまらなそうに話し始めた頃、あたしはケータイのフォルダからタケシの画像を全部消した。

あたしは彼の幸せを願う。

そう心に決めた。

窓から見える青がどこまで黒でしなく高く、あたしの気持ちとよく似ていた。

それから2ヶ月経ち、コンビニではクリスマスソングが流れ始めていた。

タケシとマミの仲がうまくいっていないのを聞いたのは、サークルの友達との飲み会の買い出しに出てる時だつた。

飲み会にはタケシが来ていた。お酒の弱い彼は缶チューハイを一杯飲んで顔を赤黒く染めていた。あたしは飲んでも飲んでも酔えずにタケシのことを見てばかりだった。

夜中の3時を過ぎたあたりで、みんなが口々にアイスを食べたいと言った。でも誰も立ち上がるうとせず、結局、ジャンケンで買い出しに行く人を決めることになった。

負けたのはあたし一人だった。1人じゃ危ないからとタケシが付いてくれた。

しゃがんでスニーカーを履くタケシの真っ赤な首を見て、

「あ……あたし、ユーユウとこが好きだったんだな」と言い出す。

街灯の光が空気に溶けて綺麗だった。

タケシの目はいつもと同じようにまっすぐを見ている。

ふいに、嘘だ、と思つた。

タケシとマミが付き合つてるなんて嘘だと思った。タケシがマミのことを好きになるはずがなかつた。だってタケシはあの時と全く変わつていなかつら。

コンビニの明かりが見え始めた辺りで、あたしは言つ。

「マミのこと好き……？」

タケシは下を向いたまま時間をかけて

「うん」と頷く。

「あたし……あたし、タケシが好き。1年の時からずっとタケシが好き」

辺りはしんとして、街全体があたしの言葉を聞いているみたいだつた。

タケシは下を向いたまま動かない。

あたしは無意識に流れた涙を無意識に拭いた。

「好き。絶対好き。マミなんかヤダ…」

声がかされた。

急に体が狭くなつて、苦しくなつた。

タケシがあたしを抱き締めていた。2人の体は驚くほど熱く、耳の先だけが凍つたように冷たかつた。

タケシは一回鼻をすすると、キスをした。

長くて短いキスだった。

タケシの舌からはカシスオレンジの味がした。

アイスを買つたあと手を繋いで帰つた。

あたしの大嫌いな彼女が大好きな彼は、今あたしの隣にいる。

あたしの大嫌いな彼女が大好きな彼は、今あたしの彼氏にならうとしている。

そして、あたしの大好きな彼は、あたしのことを大好きになり、あたしの大嫌いな彼女は、あたしのことを大嫌いになる。

(後書き)

あたしはこのストーリーが現実になる事を望んでいます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8789f/>

大好きな彼、大嫌いな彼女

2010年10月28日04時23分発行